

# NEO-EXPRESSIONISM

## 新表現主義

中ザウヒデキ

新表現主義。アメリカのミニマル、コンセプチュアルに対峙するニュー・ペインティング、イタリアの歴史的、形而上的絵画の伝統の系譜、危機意識を抱いたドイツの表現主義からの流れなど、総じて巨大なキャンヴァスに荒々しいタッチで描かれた強烈なイメージの絵画群は、「絵画らしい絵画」として80年代のアートの主流を占めたといえよう。その評価はしかし構造的・理論的分析にはまだまだ至っておらず、一時的な現象との見方も強い。J. シュナーペル(米)、G. パゼリッツ(独)、E. クック(伊)などが代表的。

オランダ系もドイツ表現主義であり、後期モダニズムの幕明けは抽象表現主義ならびにアンフォルメル、そしてポストモダンなる時代の幕明けがこのネオ・エクスプレッションニズムなのではないかと語っています。つまり氏は、

④まったく新しい時代の始まりである。

⑤と語っているわけですが、しかもこれは

⑥美術の同時に多発した。

と言います。この一九八〇年前後に世界的(アメリカ・ドイツ・イタリアなど)に発生したムラウメントが、ニュー・ペインティング、ネオ・エクスプレッションニズム、トランス・アヴァンギャルティヤなどと呼ばれたことを思い起こしておこうというわけです。ニュークなどに氏は日本イラストレーション界に起こった「ヘタウマ主義」をもこれに加え、新しい時代



上より 大竹伸朗 無題 1981  
 Galerie Watari  
 シュナーペル 夜間 1982  
 湯村輝彦 イラスト  
 近代芸術集団 CHINA TOWN  
 (UNDER) 1988

「百首の大作を三分で描いた方がいいじゃないか」という文壇をひたし、誌上で見たのはもう七、八年も前の事になるでしょうか？ 私

の記憶が正しければ、その文章は大竹伸朗氏のキチンリウタリての第一回巻のときのものだったはず。当時ハイ・ティーンだった私は文面をそのままネオに受けとってしまい、隣に掲載されていたニクミセン字程の大竹伸朗作品なるモノクロ写真を、ソウカンソウカコシカ三分で描ケルカノときりに感心した記憶があります。でも私もヘタクソ画を描く身の上なのでよくわかるのですが、どう考えてもこれは三分で描けるシロモノデナイ！ 大竹伸朗作品をそれ以来アチコチよく見かけるようになりましたが、見る度に私はコレハ三分間作品デナイという確信をいよいよ強めるに至りました。「百首の大作を三分で……」なるコトハの興義を私

が知つたのも、もともと後になつてからのこと。

て、そのコトハの興義とは何かといまです。それこそがネオ・エクスプレッションニズムの精神だったのではないのでしょうか？ 三分で描いたつていいじゃないか、まさしく三分で描いたつていいの

です。別に何分かけて描こうと

うだつていいのです。逆に、本当に三分で描いた絵がそんなに駄作だつたとしても、あるいはどんなに傑作だつたとしても、そんなことをもどろだつていいのです。問題は絵の良し悪しではなく、「三分で描いたつていいじゃないか」と言い切ることもそのものなのです。オウカリカナ？ 話をバンクにしてしまつて当時イギリスの言葉雑誌の片隅にキターコードがたつた三つだけ図示してあつて、「まあも今すぐ楽器屋でギターを買つてきて、今すぐおまえのバンドを構成しろ」とあつたそうです。オウカリカナ？ シンセの登場と普及によつて誰もかYMOのライヴインをコピーしたというのは、テクニクな話。そして、「ビックリハウズ」誌の出現も、コミケの発足も、インディーズ・レーベルの乱立も、ヘタウマ・イラストの登場も、みんなこの同じ時代の同じ事柄の現われなのです。

そしてもう一度ネオ・エクスプレッションニズムの話に戻ります。ジェリアン・シュナーベル氏はかく語つたといふ。すなわち「この時代が素晴らしいのは、どれだけ優れたアーティストが登場したかということよりもむしろ、こ

れなにも沢山の、無名のアーティストが登場したことである。たとえ彼らの作品がそんなに拙いものであつたとしても。この言葉こそネオ・エクスプレッションニズムの本質でしょう。おびたしい質と量のうら若きアーティストが登場し、彼らにこそ経筆を持つというところがこんなにもリアルだつたのです。

話を整理しましょう。ネオ・エクスプレッションニズムとは、

①三分で描いたつていいじゃないか精神。

②美術史内存在ではなく、むしろバンク等々のムラウメントと軌を一にする。

③多くの人間のリアリティをとらえ、沢山の無名のアーティストが参加したことに本質がある。——ということになります。つまり、④で明らかになつたように、視覚表現領域に直感的に表出してきたのがネオ・エクスプレッションニズムであると語つていくことが可能なのですが、中ザウヒ○キ氏は怪著「近代美術史テキスト」のなかで「新しい時代の始まりは常に表現主義である」なる仮説を立て、前期モダニズムの幕明けは印象派ならびにその極限としてのフ

タなように表はつてまい」という意味です。この「一見ヘタ」を前面に打ち出すというのはじつは大変なコンセプトでありまして、それだけ従来の価値の体系に括られることを拒否し、画のイキオイを重視するという意味では表現主義であり、またそれがリアリティをもちつた時代にあつてはきつめて多くの表現者の参加を容易にしてしまひ、ひいてはアーティストにおける生産者と消費者との二項対立までも解かず(「反資本主義」というスエオソロシイ概念なのです。その意味で「ヘタウマ」の「うま」はさほど重要ではなく、ヘタウマの言葉のなかでも①ヘタウマの次にくるのは②ヘタウマである。これが屈指のキチガイ・コンヒエタ・ミューシツクの巨匠エクスボの松前公高氏も、つい最近だと「ヘタが大事やねん。ヘタウマじゃなくても、ヘタクソでもええねん」

と断言するヤネン。最近私もハマッているペカCGの概念もこのコンセプトの延長線上にあるようです。ただし、エクスボもハカじも八〇年頃のそれとなく、一九九〇年におけるリヴァイヴアルとしてのネオ・エクスプレッションニズムの語にまで語が飛んでしまつていますので御注意ください。

最後に、いまだにネオ・エクスプレッションニズムを引きずる懸りない面々としてトナルド・ベツラ(米)、近代芸術集団(日)に着目しておきましょう。彼らこそは真正のコンセプチュアル・ヘタウマであり、その画面はワレワレ良識人の神楽を見事にサカナテしてくれませう。もはやトウゴモイイような存在で、私は個人的には大変尊敬しております。

(おまひとをイラストター)

※中ザウヒキ近代美術史テキスト印刷部からポスト・ウマイラストレーション「トムヤツクス」一九九